

<p>事例 その他の収入源の確保</p> <p style="text-align: center;">外部資金導入による内部組織の活性化</p> <p style="text-align: center;">～名古屋柳城短期大学～</p>	<p>本事例の中心人物 図書館館長・職員、教授</p>
---	---------------------------------

事例内容

【概要】

名古屋柳城短期大学は、保育に携わる専門家を養成する機関として 108 年の歴史を持つ、全国的にも珍しい保育の単科大学である。同短期大学図書館には、専門書から児童書まで特色ある約 5 万冊の蔵書がある。また、保育現場において、日々の保育に欠くことのできない教材・教具である「保育紙芝居」も 2000 点余り所蔵している。

この「保育紙芝居」は、在學生はもちろん、同短期大学卒業の幼稚園・保育所で活躍する保育者にも利用され、図書館の全貸出件数の 9.3%を占めている。

同短期大学では、保育者を志す学生や現場の保育者にとって、日常的な教材であり、貴重な資料である「保育紙芝居」の収集と学術研究を推進し、図書館を紙芝居の情報センターとするため、「子ども文化と紙芝居プロジェクト」に取り組んでいる。

このプロジェクトの内容は、以下のとおりである。

- ・「紙芝居」を通して子ども文化を考える（紙芝居に関する研究とその成果の発信）
- ・「紙芝居」を通して共感の輪をつなぐ（紙芝居実演会や展示会の開催）
- ・「紙芝居」というメディアを再構成する（紙芝居のデジタル化とインターネット上での公開）
- ・「紙芝居」というメディアを後世に残す（紙芝居の収集・整理・保存）

独立行政法人国立青少年教育振興機構の「子どもゆめ基金」より、助成金の交付が決定している。助成内容等は以下のとおりである。

- ・紙芝居ネット - テレビのなかった時代に子どもたちの目を輝かせたメディア - （子ども向け教材開発・普及活動助成金額：6,681 千円）
- ・子ども文化と紙芝居プロジェクト 2006 （子どもの読書活動助成 金額：972 千円）

【背景】

平成 7 年度に同短期大学付属の幼児教育研究所（現在は活動を休止している）から同短期大学図書館に受け入れた昭和 20～30 年代の作品が、紙質に問題を抱え損耗の危機に瀕していた。また、その他多くの紙芝居が戦災によって焼失し、散逸している。紙芝居の教材・教具としての重要性や貴重な歴史的資料としての価値を考えると保存対策や目録整備をすべきであり、それが、保育者養成機関としての社会的責任であると考えた。

補助金を含めた外部資金の導入に係る手続きには時間と人を割くことが必要となるが、同短期大学の教育理念が損なわれないよう、学生一人ひとりを尊重した教育に支障をきたさない範囲で外部資金の導入に取り組むこととした。

【取り組み内容】

図書委員会（教員、職員）を中心に平成 13 年度からデータベース作成を開始し、平成 15 年度にはデジタル紙芝居の企画に着手、古書店を中心に戦前の作品収集も開始した。理事会、学長もこの活動を「大学の大きな特色になる」と評価し、併せて外部資金導入の必要性も検討された。この間、どのような外部資金が利用できるのか、外部資金に関する情報収集を行った。収集の方法は、行政機関、研究機関、企業への問い合わせや訪問、インターネットによる情報収集などであった。その結果、「子どもゆめ基金」に辿り着いた。平成 16 年度に将来構想委員会において、「子

どもゆめ基金」に応募することが決定され、「子ども文化と紙芝居プロジェクト」として全学的取組みとして位置づけられた。平成17年度に「子どもゆめ基金」助成プログラムに応募し、平成18年度に採択・交付決定された。平成18年度の同短期大学フォーラム「紙芝居の魅力と演じ方」の成功は、教職員と学生が一丸となって取り組んだ結果である。同短期大学の取組み「紙芝居ネット」の構築に関してもマスコミに取り上げられ、外部から評価されることで学生は帰属意識と自信を持つことになり、就職活動や学習活動に良い影響を与えている。近隣地域の評価も卒業生や幼稚園・保育所を通じて高まっている。

【結果】

外部資金の導入の重要性を教職員が認識し、外部資金獲得に向けた努力が、結果的には学生も取り込んだ全学的取組みとなった。また、図書館の研究活動支援と広報において果たす役割の重要性も確認できた。学生、卒業生、近隣地域からの評価が向上し、財政的効果はもちろんであるが、広報、教学、組織の活性化においても外部資金の導入は大きな効果があった。

また、全国からの紙芝居に関する問い合わせや寄贈が増加し、紙芝居の教育的効果に対する評価の向上と教育メディアとしての研究の推進に役立っている。

成功のポイント

もともとやってきた活動を生かした取り組みであったこと

10年ほど前から保育教材としての紙芝居を、図書館を始め、学内でも少しずつ重要性が理解され、活動が自然の流れの中で発展してきていることが全学的な支持を得ることもつながった。学科の特殊性を活かした活動であったことが、教育面、学生募集面、研究面など、多岐にわたる評価の向上にもつながる成功のポイントであった。

無理をしない範囲で外部資金を獲得したこと

紙芝居は文化財という側面を持つことから、同短期大学の活動の主旨に沿う助成制度・団体をみつけることが困難であった。担当者が根気強く外部資金に対する情報収集を行い、金額や目的の合うものを探し、そのうえで応募するなど、無理のない範囲で必要な資金の獲得を行った。

学内の理解を得たこと

外部資金が導入できなかった場合には、規模を縮小しても学内予算で実施することを理事会として決定するなど、学内の理解を長い時間の中で築いてきたことも大きな後押しとなった。

今後の課題

「子どもゆめ基金」は継続的助成ではないため、継続的な資金をいかに獲得するのかが今後の課題であると述べていた。この活動が成功を収めたことにより、全国から紙芝居が集まってきたが、この保存などの地道な活動のためには継続的な資金が不可欠だからである。小規模な同短期大学にとってこうした資金を得ていくことはたやすいことではないが、現在の方針を続けていくことが重要であると思われる。

委員の所感

より良い保育者を輩出するという長い歴史の中での同短期大学の姿勢を保つことが今後の発展として重要であるとの観点から、大規模大学の真似をしないこと、教育の時間を削ってまで外部資金の獲得をしないことを強調していた。競争的な環境の中で、多くの大学がときには見失ってしまうこともあるような、この冷静な姿勢と見識こそが108年の歴史の中で発展していった強みである印象をうけた。